

本の読み方を考える
—本はどのように読んだらよいか—

開倫塾

塾長 林明夫

Q : 本はどのように読んだらよいとお考えですか。

- A : (1) 例えば、アベノミクスの3本目の矢の成長戦略を考えるときには、潜在成長率を引き上げることが求められ、そのために「イノベーション」が欠かせません。
- (2) イノベーションとは何かを考えるときには、イノベーションという考え方を世の中に広めたシュンペーターという経済学者に必ずぶち当たります。そして、シュンペーターはイノベーションをどのように考えたのかが知りたくなります。
- (3) 皆様なら、シュンペーターのイノベーションとは何かをどのようにして学びますか。少しお考えください。
- (4) 私は、シュンペーター先生についての概説書と思われる本を本屋さんで探し、まずはそれを読みました。
- (5) 根井雅弘著「シュンペーター」講談社学術文庫 講談社 2006年1月10日刊という本です。
*読み切るのに10日間ぐらいかかりました。初めての本でしたので、1ページから前日に読んだところまでを一通り読み、その上で当日は新しいところを読むという読み方をしました。
- (6) 次に、シュンペーターの主著の1つである「経済発展の理論(上)(下)」岩波書店 1977年9月16日刊の2冊を行きつ戻りつしながら1冊に2~3日かけて1週間で通読しました。すると、イノベーションとその担い手である「企業家」の意味がわかってきました。
- (7) その後、シュンペーターの入門書概説書の伊藤光晴・根井雅弘著「シュンペーター—孤高の経済学者—」岩波新書、岩波書店 1993年3月22日刊を2~3日で通読。それから、またシュンペーターの著書に戻り、
- (8) シュンペーター著「企業家とは何か」東洋経済新報社 1998年12月25日刊を読みました。
- (9) 最後に、シュンペーターの大著「資本主義、社会主義、民主主義」東洋経済新報社 1962年刊をじっくりと読み込みました。

Q : 結構、何冊も読むのですね。

- A : (1) 最初は入門書として根井先生の「シュンペーター」(講談社学術文庫)→2冊目はシュンペーターが29歳の時に執筆した主著である「経済発展の理論(上)(下)」(岩波文庫)→3冊目はまた入門書に戻って伊藤先生と根井先生の「シュンペーター」(岩波新書)で頭の整理→4冊目はシュンペーター著の「企業家とは何か」→5冊目はシュンペーターの晩年の大著「資本主義・社会主義・民主主義」を。

(2)このような順序で、入門書→初期の著作→入門書→中期の著作→後期の著作と読み進めると、1～2か月で「シュンペーター」の「イノベーション」「企業家」「創造的破壊」の考え方が腑に落ちると私は考えます。

Q：イノベーションの考え方をういたケーススタディはどこで学べばよいのでしょうか。

A：イギリスの経済週刊誌「The Economist(エコノミスト誌)」には毎号、Business のコーナーの最終ページに「Schumpeter」という特設ページがあり、シュンペーター先生の考えを用いて現代的課題を読み解いています。ちなみに、2015年1月24日－30日号の「Schumpeter」のページは「Cheep and Cheerful — After some teething trouble, frugal innovation is on the rise —」です。

Q：本を読むときにはノートを取ったほうがよいとお考えですか。

A：(1)シュンペーターの場合はどうだったか。「10歳のシュンペーターはウィーンのテレジアヌム(貴族階級の子弟の教育機関)に通い始めた。彼は卓抜な語学力(独、仏、伊、英の現代語からラテン、ギリシャの古典語まで)にさらに磨きをかけたが、注目すべきは彼が独得の速記術を修得し、幅広い読書から得た知見をノートにとる習慣を身に着けたことである」(根井著「シュンペーター」P16)

(2)問題は「ノートを取る」ことではなく、取り続けた「ノートの活用」だと考えます。ノートを何回も読み返し、自分で考えたことや後から調べたことなどをつけ加えて、一冊の本「マイノートブック」をつくるのが大切と考えます。

(3)是非やっていたきたいのは、切角本を読むのですから、「書き抜き読書ノート」を一冊つくり、気に入った文章をたとえ一行、一文字だけでも書き抜いておくことです。折に触れてこのノートを読むと、書き抜いた文章や文字が自分のものとなってくることも多いです。

Q：最後に一言どうぞ。

A：(1)最後に、「何を読むべきか」について一言。

(2)人生は長いようで短く、短いようで長いので何を読んでもOKとは思いますが、それでも「読むに値する価値ある本からじっくりと読む」ことをお勧めしたい。

(3)今回は、「イノベーション」を例にあげてシュンペーター先生の本の読み方をお話しました。「このテーマならこの人」という人をまずは決めること。すぐに主著に入らないで入門書からスタートし、若いころの主著、また入門書、人生の中途のころの主著、晩年の主著と、3冊ぐらいの力作を読むことをお勧めしたい。

(4)何年か間をおいて、また同じ本を読んだり、同じ著者の別の本を読んだりするのも面白い。何年かおきに7～8回読むと、何が言いたいかわかることが私には多いです。

以上